

2026 年 4 月号

『さくららら』

升井純子/文
小寺卓矢/写真
アリス館
2021.3 発行
(47/マ)



4 月、こんもりとした雪の中に桜のつぼみが顔を出しています。北海道北部の小さな町、幌加内のチシマザクラ、日本一遅く咲く桜です。幌加内町は国内最寒気温マイナス 41.2 度を記録した豪雪地帯。厳しい冬を乗り越えて、ゆっくりだけれど自分のタイミングで咲くさくらちゃん。主人公にふさわしい桜を探すのに何年もかかったそうです。探し歩くのをやめて、この絵本の着想の原点となった新聞記事の桜を訪ねると、さくらちゃんは、人の思惑を超えて、青空一杯に花を咲かせていました。著者の小寺さんは森を歩く写真家、レンズをのぞくと奇跡のように現れる命の輝きを写真に収めています。(A)

2026 年 5 月号

『世界をまどわせた地図』

エドワード・ブルック＝
ヒッチング/著
関谷 冬華/訳
日経ナショナルジオグラフィック社
2017.8 発行
(290/ブ)



地図は今でこそ正確なものだが、昔は冒険家たちが誰も見たことがない地へ命がけで挑戦し、地図を作ることに重要な役割を果たしていた。しかし、好奇心に満ち溢れるばかりに「ある」と信じ込み、実際に書き込んでしまった島や大陸もあったという。しかも、2012 年までグーグルマップ等に存在しない島の記載があった事実も驚きである。

探究心を持つ者は未知の領域や興味のある分野を独自の感性や美意識を深掘りし、具体的な成果や利益に結びつける。このような行動力のある者によって、「すごい本」として私たちの知的好奇心を満たしてくれる本を集めてみた。(Y)

2026 年 6 月号

『5 秒日記』

古賀及子/著
ホーム社
2026.1 発行
(914.6/コ)



日記、つけていますか？どこへ行った、何があった、など素直に書くのも良いですが、この日記のコンセプトは「5 秒のことを 200 字で書く」です。ある日の日記は、ポストに年賀状を投函しに行ったとき、自転車で通りかかった人のミント色のマフラーが美しく心惹かれた、という一瞬のこと。取り上げられているのは、忘れてしまいそうなことが多いです。俳句や短歌にするのは少し難しいけれど、日記なら手軽に、その日の空気感を思い出せる記録になると思います。

ところで、今年は私もカレンダーの小さいスペースに一言ずつ日記のようなものをつけてみています。(m)

2026 年 7 月号

『田んぼのまん中の ポツンと神社』

えぬびい/写真・文
飛鳥新社
2025.3 発行
(748/エ)



田んぼの中に佇む神社を見たことがありますか？

神社はその土地に暮らす人々の心の拠り所であり、生活とともに地域に根付いてきたものです。周囲を囲む木立は「鎮守の杜」と呼ばれ、“あの世”と“この世”の境界と信じられていました。

この本は、決して辿り着くことができない神社や、田んぼの中に鳥居が連なる神社など「なぜ、そこに？」と思う空間を切り取った一冊です。

四季ごとに魅せる風景は、花の香りや土のにおい、吹き抜ける風や寒さの中の張りつめた空気までも感じることが出来ます。

福井県は勝山市と大野市が掲載されています。(O)

2026 年 8 月号

『クマのプーさん プー横丁にたった家』

A. A. ミルン/作
石井桃子/訳
岩波書店

1962. 11 発行・1998. 12 改版
(93/ミ)



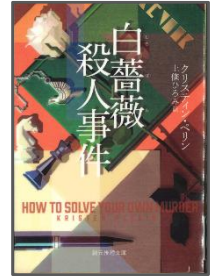
プーは、ハチミツも、詩を作るのも大好き。コブタやイーヨーなど百^{ひゃく}町^{ちやう}森の仲間たちやクリストファー・ロビンと、遊んだり、冒険しながら楽しく暮らしている。この本は『クマのプーさん』と、その続編『プー横丁にたった家』との合本。

1926 年に『クマのプーさん』の原書が出版されてから 100 年。A. A. ミルンの紡いだ物語に E. H. シェパードの挿絵はぴったりで、物語世界がより生き生きと見えてくる。日本語訳は石井桃子。「コブタが、ぜんぜん、水にかこまれるお話」など、石井の訳はリズムが心地よく、楽しい。この先も、プーの物語が多くの方に読み継がれていきますように！（K）

2026 年 9 月号

『白薔薇殺人事件』

クリスティン・ペリン/著
上條ひろみ/訳
東京創元社
2024. 7 発行
(H933/ペ)



本書は、主人公アニーの大叔母が 60 年前に告げられた「呪われた予言」と、現代で起こった大叔母殺害事件が、世代を超えて複雑に交錯するスリリングかつミステリアスな作品です。アニーはミステリ作家を目指す女性で、おっちょこちょいな一面を持っています。しかしその一方で、自然死に見せかけられた事件の不審点を見抜く鋭い観察眼を備えており、些細な違和感から真相へと迫っていきます。遺体発見の衝撃に打ちひしがれながらも事件解決に挑む姿には、探偵役として強い意志が感じられ、思わず応援したくなります。（N）

2026 年 10 月号

『ハラヘリ読書』

宮田 ナノ/著
KADOKAWA
2022. 8 発行
(019/ミ)



森茉莉のシュウクリウム、水上勉の梅干、角田光代の苦手だった食べ物など、10 人の作家の「本の中の食べ物」をテーマにした名作レビュー本です。字面で美味しい食べ物の話と、著者のクスリと笑えるエッセイがマンガで綴られています。文章とマンガの融合は、視覚的なわかりやすさがあり、文字だけの本よりとても読みやすいです。

どのエピソードも着眼点が素晴らしく、マンガで可愛く描かれているからか、遠い存在だった作家たちが身近に感じられます。なかでも内田百閒の「おかうこ、かりかり、お茶漬、さぶさぶ」における「不憫の代名詞“沢庵”」への百閒と著者の攻防戦が楽しく、沢庵を平和に食べたくなりました！（K）

